

## 特別寄稿

# 支え合うこと、学び合うこと —アフガニスタン医療復興支援の現場から—



菊地 真紀子

2001年9月11日。ただ身の周りの雑事に追われるだけの毎日に、あぐらをかいていた私は画面一杯に映し出されたあの映像に、鋭く胸をえぐられるような衝撃を覚えました。あれから2年の歳月が過ぎようとしています。しかし世界は、平和・共生への道を探求するどころか、まるで憎しみと復讐の終わり無き連鎖に巻き込まれてしまったかの如く、さらに深い混沌の渦に漂うばかりです。その中にあって日本赤十字社（以下日赤）は昨年7月から、アフガニスタン政府保健省が統括する北部地域の2つの病院（クンドウス病院、タロカン病院）に対して医療復興支援活動を展開しており、医師・看護師・技術者等、数名の日本人スタッフが常駐し、各国からの国際赤十字スタッフや現地スタッフと共に活動に取り組んでいます。私は昨年10月からの3ヶ月にわたり、産婦人科医として同事業に参加させて頂く機会を得ました。幹線道路のすぐ両脇に広がる荒涼とした地雷原、その地雷に足を奪われた少年（図1）、町に放置されたままの朽ちた戦車等、テレビで見ていた光景がそのまま目前に現れたとき、この現実を信じたくないという衝動に駆られ、言い知れぬ恐怖を覚えました。同時に、この過酷な状況に懸命に対峙してきたアフガンの人々に畏敬の念がこみ上げて来ました。

さて現場では、プロジェクトマネージャーで



図1 地雷で足を奪われた。

少年の夢は、羊飼になること。

ある熊本赤十字病院第2麻酔科部長 鈴木隆雄医師の統率のもと、名古屋第二赤十字病院 伊藤明子看護師長、さいたま赤十字病院 菅原直子看護師長ら国際医療救援の先輩方と共に、日赤医療チームの一員として活動しておりました。そのなかで産婦人科医である私は、「女性病棟」での支援に従事しておりました。（イスラム教国であるアフガニスタンでは一般に、女性と男性とが共に社会生活を営むことはなく、「病院」という特殊な環境であっても例外とは見なされません。ですから病棟も「男性病棟」と「女性病棟」とがそれぞれ別棟にあり、完全に分離・独立しています。）そして、文化の違いや宗教的背景、言葉の壁などが山積し一朝一夕には事が進まない、このような特殊な環境下で私と共に活動し、頼もしく支えてくれたのが赤十字アフガン人スタッフでした。なかでも特に御世話になったのは、フマユン氏とムバラク氏です。フマユン氏はベテランの外科医で、豊富な臨床経験もさることながら、奨学生として

---

KIKUCHI Makiko

日本赤十字社医療センター 産婦人科医師

k-maki@themis.ocn.ne.jp

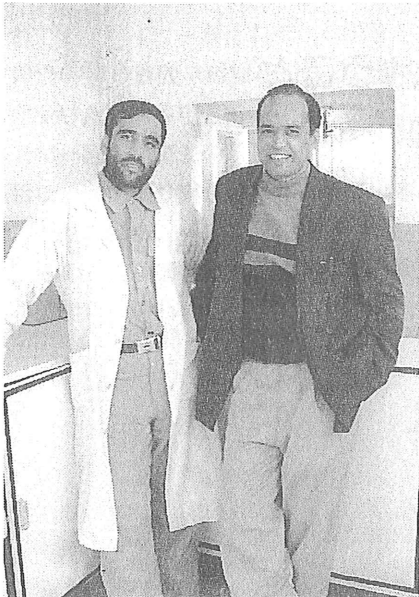


図2 頼れる同僚であり尊敬する先輩フマユン氏 (写真右)

中国に留学していた経歴も持つ尊敬すべき先輩です(図2)。ムバラク氏は麻酔助手で、その柔和な笑顔とは裏腹に、長年にわたりパキスタン・クエッタにある国際赤十字委員会(ICRC)管轄の戦傷外科病院で壮絶な手術を支えてきた、百戦錬磨の兵です(図3)。片言のダリ語(北部地域で主に話される言語)しか話せず、全てが手探りの状態で活動を始めた私にとって、両氏はまさにコミュニケーションの要であり、両氏との二人三脚なくては活動が成立し得ないといっても過言ではありませんでした。

ある日、お腹のとても大きな妊婦さんが家族に付き添われて病院にやってきました。顔面は蒼白で遠く意識の中から「お腹が痛い、お腹が痛い。」と懸命に訴えていました。子宮破裂が疑われ、アフガン人産婦人科医の執刀で緊急手術が行われることになりました。数人のアフガン人医師が見守るなかで始まったその手術では、私は助手を務めておりましたが、「子宮破裂」という今の日本では遭遇し得ない光景に思わず息を呑みました。お腹をあけると、やはり



図3 どんな時も暖かい笑顔で支えてくれたムバラク氏 (写真左)

子宮の壁は破れており、その中で元気に育つはずだった双子の赤ちゃんは、すでに幼い命を失っていました。幸い子宮を摘出ただけで手術は終了し、妊婦さんの命に別状はありませんでした。手術が終わりほっと一息ついていると、周囲で見学していた医師たちが集まってきました。「細かい所がよく見えなかったのでどんな手術だったか解説してほしい。」とおっしゃるのです。そこでフマユン医師に通訳を頼んで、説明をし始めたのですが、どうも聴衆の反応が悪い事に気づきました。私の説明自体にまとまりがなく、理解しづらいのかと考えてフマユン医師に聞くと、意外な答えが返ってきました。

「彼らは解剖用語や解剖学的位置関係など基本事項がよく分からないので、それをもっと知りたいと言っている。」との事なのです。不明な点に出会えば、教科書を広げ、図書館で資料をコピーし、必要ならばインターネットで検索する、という環境にどっぷり浸っていた私には、それはまさにショッキングな出来事でした。つまり、医師たちが自ら努力しようにもこの混乱

したアフガンにあっては、模範とすべき医学書もなく、ただ必要に迫られて次々に医療行為を行わざるを得なかったのです。そこで、持参した解剖学書のエッセンスを抜粋してダリ語に訳し、医師の皆さんに配布してみるのはどうだろうかと思い立ち、大変な労力を要する仕事であることは明らかでしたが、フマユン氏に協力をお願いしてみました。すると「それは是非やってみたい。皆の喜ぶ顔が目に見えますよ。アフガンの医師は、あまりの危険さに他国からの支援が全くなかった時期でさえ、劣悪な環境下で懸命に診療に励み何とか医療を支えてきました。その経験の豊富さはもちろん貴重です。しかし同時に、正しい知識と理論がなければ、これからのアフガンの医療レベルを向上させることはできないということも感じているのです。だから、同じアフガンの医者として、学びたいという彼らの気持ちを大切にしたいのです。英語の医学書は何とか探すことはできても、ダリ語に翻訳されたものは殆どありません。そして英語が苦手な医師が多いのも事実。だからといって、学びたいという意欲が劣っているわけではない。僕にできることなら、喜んで何でもしましょう。」と明るい笑顔が返ってきました。どんなに優れた内容であっても、外国語の書物を読みこなすには大変なエネルギーが必要です。一方で、母国語で書かれた記述であれば、忙しい診療の合間だとしても一瞬の内に理解できるものです。それからは、アフガン人医師達との毎日の協力を通じて知った、『現場で必要とされている知識』を拾い上げ、実地診療の即戦力になりそうな項目を選び出しては、順次英語からダリ語に翻訳し、皆さんに読んで頂くというサポートが始まりました。そして味わい深い手書きのダリ語版資料を手に、文化や宗教の違いを越えて、「患者さんのためのより良い医療とは何か」という共通の思いに立脚して議論を交わす毎日がやって来しました(図4)。ある時はフマユン氏が、そしてある時にはムバラク氏がその議論の通訳を担当してくれましたが、

いずれの表情も普段以上に活き活きとしているように感じられ、きっと私と同様に医療者としての一体感を楽しんでいたのではないかと思います。



図4 ダリ語の資料を手に議論を交わした。筆者は写真左。隣はフマユン氏。

任期終了近くになった頃、かねてからプロジェクトマネージャーの鈴木先生が進めておられた、図書館新設計画が実現間近となりました。ある日の午後、病院から戻った私たちを、膨大な数の医学書とジャーナルが出迎えてくれました。発注していた医学書類が届いたのです。その光景に、まるで少年のような歓声をあげて目を輝かせたのは、やはりフマユン氏でした。一冊、一冊、大切にページをめくるその姿に、学ぶことがいかに喜ばしいものであるかを思い出すことができました。「この日が来るのを待っていました。内戦と干ばつと紛争。この20年は混乱ばかりで、落ち着いて学ぶことが本当に難しかった。でも、もう違いますね、きっと。」

私がアフガンを離れた2003年1月は、イラク戦争が始まるか否かがアフガンでも最大の関心事であり、反米そして反日の気運が不穏にも高まり始めた頃でした。昼休みの雑談も、どうしてもイラク問題に終始してしまうそんなある日、ムバラク氏はつぶやきました。「アメリカはイラクを攻撃しないと思います。だってブッシュ大統領はこう演説したんですから。アフガンを見捨てないと。これからは必要ならばずっと支援を続けると。この国の復興は始まったばかり。アメリカ軍だってまだ駐留している。こ

んな時に他の国に攻撃を仕掛けるなんて、とても考えられません。」私は小さく頷いたまま、それ以上言葉を返すことができませんでした。米国はイラク戦争の開始を暗黙の内に決めているのではないかと確信にも似た思いを持っていたからです。同時に、ムバラク氏の言葉の陰に多くのアフガン人が抱いているであろう不安が垣間見られるようで、やるせない気持ちになりました。20 年以上にわたり混乱の渦中にありながら、国際社会の注目を得ることができなかったアフガン。9.11.を機にやっと必要な国際援助を受けることができた、それなのに。イラク戦争が始まったら世界はきっと、またアフガ

ンを忘れてしまうのではないか。また見捨てられてしまうのではないか。

今、メディアはイラク戦争後の一向に改善しない不安定な社会情勢を連日伝え、この戦争の意味を検証しています。アフガンが画面を賑わす機会はめっきり少なくなりました。しかし私達の仲間は今もなお、その乾いた大地にあって根を張るかの如く着実に復興の礎を築いています。支えあうこと、学び合うことの大切さを教えてくれたアフガニスタン。この国に生きるすべての人々の上に大きな祝福がありますことを深く願ってやみません。